

相模湾沿岸に漂着したオウムガイ（軟体動物門：頭足綱）の記録

池田 等・倉持卓司・竹山 紘

Hitoshi Ikeda, Takashi Kuramochi and Hiroshi Takeyama:

Records of *Nautilus pompilius* (Mollusca; Cephalopoda) Drifted Ashore
on the Coast of Sagami Bay, Kanagawa Prefecture, Central Japan

はじめに

オウムガイ *Nautilus pompilius* Linnaeus, 1758 は、熱帯海域のフィリピン～パラオ諸島に生息する頭足類の一種である。オウムガイ類は、水深 50 ～ 600m 前後を垂直移動する生態をもつことから、殻に浮力を調整するための隔壁構造を備えている。そのため、オウムガイは、死後も殻内部に海水が入らないまま、長期間浮遊することがあり、海流によって本来の生息域から離れた海域にまで運ばれ漂着することが報告されている (Hamada, 1977 など)。また、日本列島沿岸域におけるオウムガイの漂着記録は、浜田 (1965)・倉持 (2000) などにより報告されている。

本稿では、相模湾沿岸に漂着したオウムガイについて報告する。

相模湾でのオウムガイの漂着情報を提供していただい

た、相模貝類研究談話会の伊藤久美子氏に感謝申し上げます。

採集試料の記録

オウムガイ *Nautilus pompilius* Linnaeus, 1758

試料 1

採集日：2000 年 6 月 21 日（図 2.1）

産地：逗子海岸（図1）

残存部の殻長径 $121.4 \text{ mm} + \alpha$ ， 殻高 $119.4 \text{ mm} + \alpha$

採集者：竹山 紘

試料 2

採集日：2002 年 9 月 5 日 (図 2. 2)

产地：逗子海岸（図1）

残存部の殻長径 $114.5 \text{ mm} + \alpha$ 、殻高 $93.3 \text{ mm} + \alpha$

採集者：竹山 紘

試料 3

採集日：2002 年 秋 (図 2.3)

産地：七里ヶ浜（図1）

残存部の殻長径 115.7mm+ α ， 殻高 98.9mm

採集者：伊藤久美子氏

いずれの試料も殻の損傷は激しく、保存状態は良好とはいえないが、残存部の殻表面には、比較的鮮明な火災模様を残す。開口部は、大きく欠損しているが、螺層部には欠損はほとんどみられない。また、殻表面にはコケムシおよび、緑藻類、紅藻類の石灰藻の付着痕が観察された。

考察

日本列島周辺海域におけるオウムガイの漂着は、太平洋岸では茨城県以南、日本海側では秋田県以南の海岸より報告されている(浜田, 1965; Hamada, 1977; 中西,

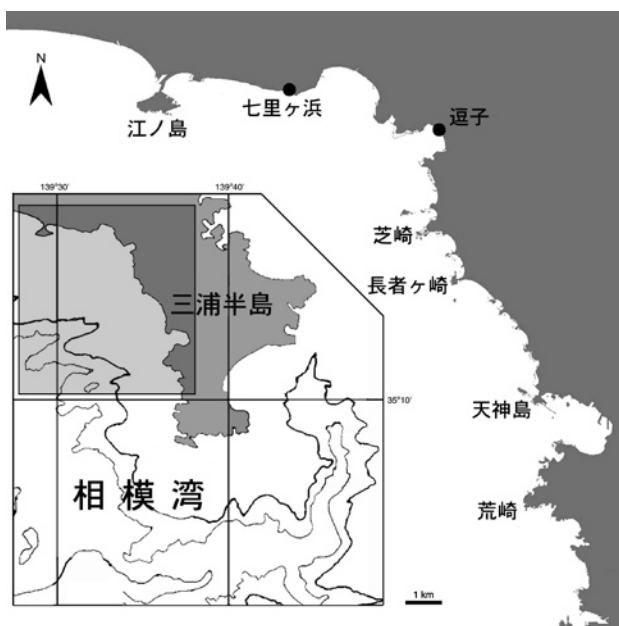


図 1. 相模湾沿岸に漂着したオウムガイ *Nautilus pompilius* Linnaeus, 1758 の採集地点

1990; 倉持, 2000 など)。また, 八重山諸島小浜島からは, ヒロベソオウムガイ *Nautilus scrobiculatus* Lightfoot の漂着が記録されている(浜田・中西, 1983) (* インターネット上にも採集記録があるが確認していない)。同じ頭足類のトグロコウイカ *Spirula spirula* (Linnaeus) も鴨川市東条海岸, 和歌山県白浜, 西表島での漂着が記録されている(立川, 2004)。これらの漂着と同時に漂着したモダマやゴバンノアシなどの南方系の植物種子が採集されることもある(倉持, 2000; 立川, 2004 など)。

オウムガイは, 死後も殻が浮力を有することから, 海流により本来の生息域より著しく離れた海域での漂着が報告されている(Hamada, 1977 など)。しかし, 漂着して採集される試料は, 多くの場合, 損傷が激しいことから, 詳細な記録は少ない。そのため, 漂着により得られている試料中には, 人為的に投棄されたと思われる試料が混雑していることも考えられる。特にオウムガイの殻は, 土産物や観賞用として大量に市場に流通していることも理由のひとつである。浜田(1965)は, 和歌山県潮岬周辺

で採集したオウムガイの漂着殻について, 近隣に遠洋漁業の基地があり, 戦前・戦後を通じ船員がオウムガイの生息海域から相当量の殻を持ちかえり, 投棄されたものを再拾得している可能性を指摘している。また, 近年はペットショップで飼育観賞用としてオウムガイが生きたまま販売されており, これらの個体の野外投棄と考えられる再拾得例も報告されている(観音崎自然博物館振興会, 1998)。しかし, 一方では黒潮系暖水により日本列島沿岸にまで運ばれたと考えられる個体もあり, 一概にすべての漂着によって得られたオウムガイが人為的投棄によるものとは言えない。

オウムガイは, 産地により殻にみられる火炎模様に変異が認められる。今回採集されたオウムガイの殻に見られる火炎模様は, どちらかといえばフィリピン近海に生息する一般的な個体に多く見られる模様に近似している。また, コケムシ類や石灰藻など付着生物の固着状況からも長期間海洋を浮遊していたものと思われる。2002年に偶然にも2個体が漂着していることから, この年の黒潮系暖流の影響が強い時期に相模湾内に運ばれたものと推察される。

引用文献

- 浜田隆士, 1965. オウムガイ類の遺骸漂着. *Venus*, **24**(3): 181-199.
- Hamada, T. 1977. Distribution and some ecological barriers of modern *Nautilus* species. *Sci Pap. Coll. Gen. Educ. Univ. Tokyo*, **27**: 89-102.
- 浜田隆士・中西弘樹, 1983. ヒロベソオウムガイの日本への漂着. *Venus*, **42**(2): 61.
- 観音崎自然博物館振興会, 1998. たたらはまだより, たたらはま, 14, 19. 社団法人観音崎自然博物館振興会.
- 倉持卓司, 2000. 奄美群島, 喜界島に漂着したオウムガイ. *南紀生物*, **42**(2): 153.
- 中西弘樹, 1990. 海流の贈り物—漂着物の生態学—. 自然叢書 15, 254pp. 平凡社, 東京.
- 立川浩之, 2004. 千葉県鴨川市に漂着したトグロコウイカの死殻(コウイカ目: トグロコウイカ科). *南紀生物*, **46**(1): 63-64.

(池田: 葉山しおさい博物館,
倉持: 葉山しおさい博物館気付,
竹山: 神奈川県逗子市)

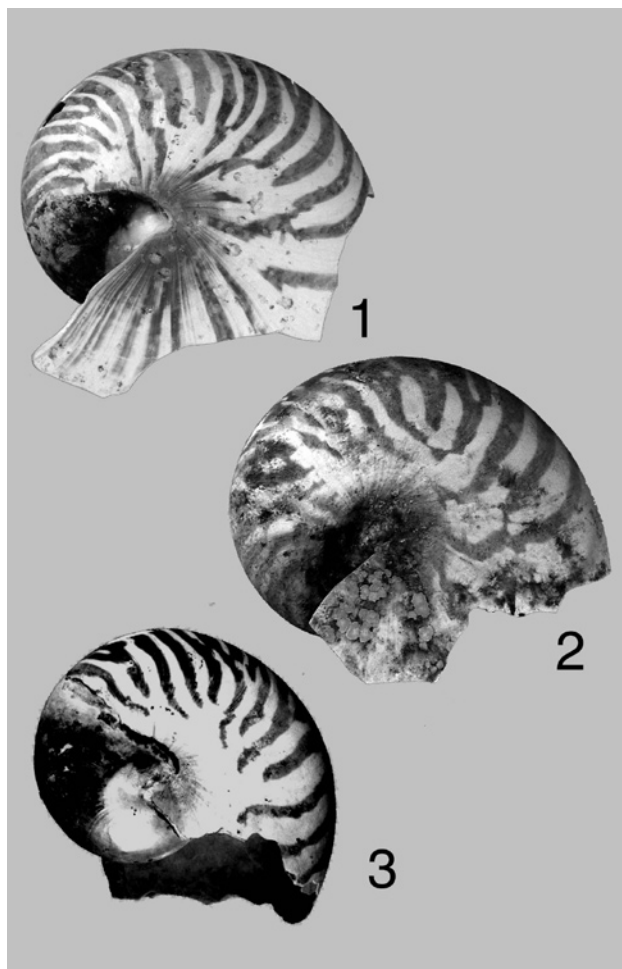


図2. 相模湾沿岸に漂着したオウムガイ *Nautilus pompilius* Linnaeus, 1758

1. 産地: 逗子海岸 2000年6月21日採集
殻長径 121.4 mm+ α
2. 産地: 逗子海岸. 2002年9月5日
殻長径 114.5 mm+ α
3. 産地: 七里ヶ浜. 2002年秋採集
殻長径 115.7 mm+ α